

ヒットの予感E X

20 カ国以上でベストセラー第 1 位!

1987 年『星の巡礼』を発表し注目を集め、88 年刊行の『アルケミスト』が世界で 2700 万部を突破した大ベストセラー作家の最新刊。

2003 年度の世界 No.1 ベストセラーとなっている本書は、セックスを題材に選び真実の愛を描いた物語。「魂」の作家が満を持して放つ肉体と魂を融合させた意欲作。

『11 分間』

パウロ・コエーリョ

キリスト文化圏の中でタブーとされる、性の重要性、魂と肉体の融合を真っ向から書いてみたい

今や世界でベストセラーになっている『11 分間』。そもそもそれはどのようにして生まれたのだろうか。

「わたしはだいぶ前から性の重要性、魂と肉体の融合を真っ向から取り上げたいと思っていました。現代はセックスのイメージだけが独り歩きしており、性を通して自分自身を見つめるのが非常に困難な時代です。でも〈セックス〉を取り上げるに当たり、どのような手法を用いたらよいか分かりませんでした。2000 年、スイスのチューリッヒを訪れ、現役のブラジル人娼婦から実体験を聞く機会がありました。この時に小説の具体的アイデアが湧いてきました」

パウロ・コエーリョは『星の巡礼』に始まる一連の作品の中で愛とセックスが人間の避けて通ることのできない真摯な課題であることを再三暗示して

きた。作家としてデビューする前の作詞家時代にはブラジルの歌手エリス・レジーナのために『ミ・デイシャス・ローカ』(わたしを狂ったままにしておいて) という意味ありげな詞も書いている。セックスを想像するだけで罪とされるキリスト文化圏の中で少年期を迎えたパウロ・コエーリョにとって聖書の「汝姦淫するなかれ」という言葉が脅し文句のように鳴り響いたであろうことは想像に難くない。

『11 分間』を書くという行為は、わたしがわたし自身の性を発見し、率直に受け入れることを意味しました。わたしが一生悩み、考えてきたことの集大成のようなものです。わたしは長年、キリスト教の原罪意識にさいなまれてきました。そしてそれに反抗し、やっと自分の道に出会ったプロセスを描写したのが『星の巡礼』でした。セックスはキリスト教圏の問題であるのみならず人類の普遍的課題だと思いました。自分の男性性、女性性を受け入れるということ。セックスというのはペニスの挿入に集約されるものではないということ。挿入神話が広まったせいで悩みの種が生まれました。挿入で満足を得られないのは自分が悪いせいだと考える女性、女性を満足させることができないのは俺のせいだと思い込む人々が急増したのです。セックスは、魂と肉体のダイレクトな対話です。男女が二人っきりで向かい合った時、彼らは子供に戻ります。でも、いざとなったらどうしていいかわからず、心の中でうろたえている男性も少なくありませ

ん。『11 分間』は、親密な雰囲気の中で、性のタブーを取り払っていく本です」

『11 分間』の主人公、娼婦のマリーアはパウロ・コエーリョ同様、ブラジル生まれだ。自伝的作品『星の巡礼』を除けば、ブラジル出身者が主人公として初めて登場する。

「事実になるべく近づきたいと思いました。実在するマリーアはブラジル人の娼婦ですから。『11 分間』の 90%は実話に基づいています。ブラジル人女性にはセクシーといった性的イメージがついてまわるため、そのイメージを駄目押しする危険がありましたが、マリーアはあえてブラジル出身者のままにしました。ブラジル人女性 3 人から、『11 分間』はブラジル人女性のイメージを傷つけたという抗議の手紙が届きましたが、読んでもらえばわかるようにマリーアがブラジル人女性を象徴しているわけでは決してありません。マリーアは、ブラジル人女性である以上に、自分自身を受け入れるとはどういうことかを探究する女性の象徴です。実在のマリーアは現在、スイスでもとても幸せな日々を送っています」

一年の半分を
世界を旅して過ごす
2001 年には
日本の熊野に滞在

パウロ・コエーリョは一年の半分を
フランス・ピレネー地方の自宅で過ご

し、残りの半分を世界の旅に費やす。

「自分の住まいは空港かもしれない」という言葉がリアルだ。旅の軌跡は各作品にちりばめられている。一方、『11分間』の冒頭ではマリーアの故郷であるブラジルの田舎町トリオデジャネイロのコントラストが、むしろ水彩画タッチともいえるこだわりのなさでさらりと描かれている。コエーリョの故郷ブラジルに対する（無）距離感の証左のようでもある。

「2週間前、わたしはスイスのダボスで日本人の作家カズオ・イシグロ（石黒和夫）と一緒にいた。彼は英国人作家ですが、両親は日本人で幼少時代を日本で過ごしています。彼は、自分が記憶する日本を失わないため、思い出を維持するために日本を書くといっていました。わたしは長年ブラジルで生活したし、ブラジルにはしょっちゅう出かけているので心理的距離感は一切ありません。わたしの中にブラジルが生きています。手で触れることはできませんが、情感はいつも湧いています」

『11分間』の後半ではマリーアが、日本の山岳仏教のひとつである修験道にならって石の道を裸足で歩く場面がある。短い非常に象徴的な場面だ。コエーリョの日本好きは知る人ぞ知るであるが、和食以外の日本文化が具体的な形をとって作品中に登場するのも初めてのこと。

「わたしは2001年に日本を訪れた時、初めて修験道の里、熊野を訪ねました。日本の俳人が教えてくれたのです。修験道の自然に対する愛、敬意、自然と

の直接交流に感動しました。1 週間熊野に滞在しました。マリーアに石の道を歩かせたのは熊野の経験が素晴らしかったからです。実はわたしには日本人の恋人がいました。もう 30 年も前のことです。横浜出身の女性で、ロンドンで知り合いました。あまり長続きしませんでしたがお互いが、全く違う文化背景で育ったせいか何かを発見し合う試みでもありました。その時、わたしは自分の性にとっても満足しました。なぜなら、わたしは日本の男性がどのようにセックスを行うのか知らなかったし、彼女もわたしが初めての外国人であったせいか、セックスを通して相手の何かに直接触れ融合することができたのだと思います。既成概念からあらかじめ解放されていたのです。セックスは相手の発見ではあっても、ひたすら何かを待つことではありません」

『11 分間』は、アメリカの司法当局がセックスに関する作品『7 分間』を検閲しようとした話を取り上げた作家アーヴィング・ウォレスの本にヒントを得てつけた題名だという。『7 分間』に 4 分を加えて『11 分間』にした。4 分間の違いは大きい。

「確かに 4 分の違いはとても大きい(爆笑)。でも、わたしのほうがアーヴィング・ウォレスよりも現実に近いと思いますよ。実は最近ある雑誌が、アーヴィング・ウォレスの 7 分間とパウロ・コエリョの 11 分間のどちらが現実に近いかを実験しました。女性にストップウォッチを渡して、行為そのものの時間を計ったのです。3 分から 28

分という結果が出ました。でも、わたしは28分というのは信じませんね。この女性はちょっと見栄を張りたかったのだと思います。7分から12分というのが一番多かったそうです。11分は現実に近いといえるでしょう。断っておきますが、この11分というのは、ペニス挿入してからの時間ですよ」

これまでの作品ではセックスがどちらかという奥ゆかしい形で取り上げられていたが、今回は直球である。『11分間』の読者の反応はどのようなだろう？

「信じられないくらい多くの反応が寄せられました。よくぞ女性の性を取り上げてくれたという女性読者、悩んでいるのは自分だけでなかったことがわかり気分が楽になったという男性からの手紙がありました。皆、一人で悩んでいたのですね」

自分の本が世界的に売れる理由を分析してみたことはありますか？

「わたしは自己分析することを禁止しています。分析し始めたら最後、無垢な部分を失ってしまうような気がしません」

では最後に日本の読者へのメッセージを。

「あなたがあなたの心と相談して決めた道を生きてください。世間がそうしているからそう生きる、ではなく」

パウロ・コエーリョ (Paulo Coelho) ●1947年ブラジル、リオデジャネイロ生まれ。世界中を旅したのち、音楽とジャーナリズムの世界に入る。日本では『アルケミスト—夢を旅した少年—』『ピエドラ川のほとりで私は泣いた』『星の巡礼』『ベロニカは死ぬことにした』『第五の山』(すべて角川文庫)などがある。

『11 分間』

パウロ・コエーリョ／著

且 敬介／訳 角川書店 1600 円

恐らく人間なら誰しも一度は頭の中で考え、思い悩み、でもなかなか口に出して率直には
いえない個人的最重要問題のひとつが“セックス”であろう。「自分の作品にはいつもちょ
っと挑発的などころがある」と語る作家パウロ・コエーリョが真っ向からセックスを取り
上げた最新小説、それが 2003 年度世界ベストセラー第 1 位に輝く『11 分間』である。ス
トレートな、あまりにストレートな、それでいてインティメイトな語り口が挑発の域を超
え文字通り人間解放を促す。著者にとってのテーマの必然性、緊急性がそこはかたく漂
う小説でもある。

取材・文／木立玲子 撮影／宮本敏明

© Da Vinci/Media Factory. April 2004

<http://www.mf-davinci.com/>